



・・・珊瑚礁の白い砂浜は、  
どこまでも続くかのように  
遠浅の海へと続き  
そこに暮らす人々は、貧しくとも  
その日の恵みに感謝し、  
穏やかな 笑みを浮かべる・・・



## フィリピン スタディ ツアー

～セブ島の光と影～

田中 成美 著



## ①プロローグ

何を隠そう、私は今年めでたく還暦を迎えた。

そこで御多分に漏れず、私も「記念になる何かをしたい」と思っていたところ、ひよんなことで、今回のスタディツアーの情報が入り、即座に参加することに決めた次第である。

ツアー内容を見てみると、「スラム街訪問」、「ゴミ山視察」、「小学校訪問」、「JICA 訪問」、その他に「アイランド ホッピング」や「スノーケリング」、「農家ホームステイ」と魅力あるアクティビティが満載であり、私の好みにピッタリであった。

注) JICA (国際協力機構/Japan International Cooperation Agency)

このツアーを企画されたのは、JICA の海外青年協力隊として3年間セブに滞在されたことのあるYさんだ。Yさんは帰国後、フェアトレードの会社を立ち上げられ、今も日本とフィリピンを煩雑に行き来されている。

フェアトレードとは、「フェア」な「貿易」のことで、アジアやアフリカ等の、途上国と言われる国や地域の人たちが作った物を長期的に適正な価格で買い、彼らの生活と生産が持続可能になる貿易をするビジネスである。熊本市も「フェアトレードシティ」を宣言していて、3月末に、国際会議を開いたばかりである。

「海外旅行に行く時は、一緒に連れて行って!」と、普段から粘り強くアピールしている友人のCさんにも声をかけてみた。不安と期待の葛藤の末、ついに行く決心をしたCさんは、私の良きトラベルパートナーとして2週間お付き合い頂いた。

「わがままな私には覚悟しておくように」とは御注意申し上げておいたが、今頃はさぞ懲りられていることだろう。(笑)

・・・「薪を燃やして調理しながら、フェイスブックを使いこなす」、「テレビはあまり普及していないが、DVDを皆んなで見て楽しむ」、「高等教育を受ける人は少ないが、英語は誰でも使える」、「どんなに貧しくても、その日の糧があれば、家族が元気なら、幸せ」・・・  
そんな相反する事とが混在し、共存するフィリピンへの旅は本当に印象深いものでした。

そんな旅ストーリーの一部を、ここに紹介させていただきます。

平成26年4月1日

**\*旅の写真で綴った「フォトストーリー」をUTUBEで御覧いただけます。**

(こちらをクリック!) → [https://www.youtube.com/watch?v=3F9nJD7R\\_m4](https://www.youtube.com/watch?v=3F9nJD7R_m4)

## ② 小学校訪問

### ☆生徒数は飽和状態

およそ 1,200 万人が暮らす大都市マニラに一泊した後、約 1 時間のフライトで私達は目指すセブに着いた。

ここセブ島はフィリピンのどこに位置するのか、御存知だろうか。

7,107 もの多くの島々から成るフィリピン！その膨大な数の島々をフィリピンは 3 地域に分けている。

ルソン、ビサヤ、ミンダナオ諸島であるが、セブ島は、フィリピン中央部のピサヤ諸島に位置している。このピサヤ諸島は、フィリピン随一のリゾート地が広がるエリアであるが、その中心リゾート地はセブで、世界でも名の通ったビーチが広がり、ダイビングでも人気の地である。

白い砂浜、珊瑚礁、青い海、そしてため息が出そうな高級ホテルのビーチで寝そべり、珊瑚礁でスノーケリング・・・そんなことが出来る日が待ち遠しい。

しかし、そんな楽しみは後日に回すことにして、今日のメインの小学校訪問に集中することにした。

私達が訪れたのは、セブ市の中心部からタクシーで数分の距離にある小学校で、周りにはスラム街も広がる貧しい地域にある公立小学校であった。児童数は約 2,600 人！この数は、日本の、少なくとも熊本の小学校では考えられない程の生徒数である。

これはフィリピンのが出生率 3.14（2010 年統計）と、日本から見れば羨ましいようなピラミッド型が原因ではない。小学校そのものの数が不足しているために、各学校が抱える生徒数が膨大なものになっている。

校内に入ると、一人の先生が案内してくれたが、その先生から色々お話を聞きながら各教室を回った。クラス数は 58 で、教室数は 34 あるそうだ。

「エッ？その差 14 はどういうこと？」

先生によると、1 年生から 5 年生までは半日制で、午前と午後で入れ替わるのである。例えば、1 年生は朝 6 時から 12 時まで勉強して帰宅する、その後 4 年生が 12 時から 6 時まで来て勉強するのだそうだ。ただ、6 年生だけが全日製となっているらしい。

以前は、もっと多くの学年が全日制で来ていたが、去年は、11 月の台風だけでなく、その前月にも、マグニチュード 7.2 もの大きな地震がセブを襲っており、校舎の被害も大きく、教室のいくつかも破壊されたまま使えない状況とのことだった。



教室は生徒で溢れている



調理室では薪を燃やしている

## ☆生徒達の様子

そんな過酷な災害の年をくぐり抜けた子供達も、さぞ大変な、悲しい思いをしたことだろう。だがしかし、会う子供、会う子供、彼等の様子はとても明るく元気で、私達への好奇心に満ち満ちている様子で、どこか心救われる思いがした。

教室に入ると、全員が起立して挨拶の言葉を英語で言ってくれる。教室はもちろん寿司詰め状態である。

“Hello. Welcome to our school, visitors.”

と、私達が入る教室、入る教室でそのような事を声を揃えて言ってくれるので、少々疲れ気味の旅行メンバーたちの顔にも思わず笑みがこぼれていた。

各クラスを回りながら気付くことがあった。

それは各クラスの児童達の年齢が均一ではないという事だ。例えば2年生のクラスに5年生位の背だけの児童が混じっていたりする。

ツアーリーダーのYさん曰く、「この辺りのスラム街の子供達は、毎日学校に来れない子も少なからずいて、しばらく休校した後、また登校する子供達も結構いるんですよ。だから色々な年齢の子供達が一緒に教室で学べるんです」

その日の生活の糧を得るために親の手伝いをする、そして学校も休まざるを得ない、そんな子供も多いに違いない。

## ☆調理室はまだ薪を使っている

先生の説明を聞きながら、校舎を見学していると、薪を燃やして調理している所に出た。そこは何と学校の「調理場」だった。

調理場と言っても、薪で煮炊きする場所が二つあるだけである。

台風が来る前はもう少しましな調理場があったそうだが、被害にあってからまだ手つかずの状態



なのだそうだ。

フィリピンに来て驚くのは、一般的にまだ薪で調理するのが普通で、また洗濯機も普及しておらず、冷蔵庫もない。学校でもそれは同じのようだ。

また、ホテルの近くの「ランドリー」でも同じで、手で洗い自然乾燥なために、洗濯物を出してから戻ってくるまで1～2日はかかってしまうので、帰国する前日などに出さないように御注意である。しかし、衣類自体は自然の優しい洗濯を享受して、喜んでいるかもしれない（笑）

さて、その調理場で二人の女性が作っていたのは、子供達の「おやつ」だそうだ。オーストラリアのあるNGOが寄付してくれた食糧だそうで、これで子供達の栄養状態が少し改善されるらしい。

### ❖子供達も英語は普通にこなす

ツアーリーダーのYさんとの打ち合わせで、この小学校でカードゲームをしながら、「日本語紹介」をさせていただくことになっていた。

当日、校長先生の許可もおりて、5年生のクラスですることになった。私ももちろん、説明は全て英語だ。

これがもし日本だったら、英語で説明し直したら直ぐに、「分かんない！」という言葉が帰って来るのが普通だが、フィリピンの子供達は違う。皆よく英語を理解するのである。

「どうして皆んな英語がこんなに良くできるのですか？」と、後で先生に聞いてみたら、「英語の授業は毎日ありますし、学年が上になると授業をオールイングリッシュとする科目が増えてきます。また、テレビも英語番組が多いんですよ」とのことだった。

フィリピン政府は海外への出稼ぎを、外貨獲得の手段として奨励しているそうだ。英語教育に力を入れるのも必然と言うべきか。

また、日本が侵攻するまでの約100年間はアメリカ領土だったのだから、その素地があるのも当然であると言える。

子供達の強い視線を浴びながら、英語で日本語の単語を説明し、リピート練習をさせて、その後「〇〇〇を持っていますか？」の文練習をさせた後に、ゲームを開始した。

楽しく学習させれば、飲み込みが早いのは子供達の世界共通事項で、ゲームが終わる頃には、教えた日本語はすっかり覚えてしまい、興奮冷めやらぬ雰囲気だった。一緒に参加したCさん始め、他のツアー参加者も一緒にお手伝いいただいて、それぞれに子供達との交流を楽しむことができて本当に良かった。

おかげで良い思い出を作ることができたと、感謝している。



初めての日本語に、子供達は興味深々



校長先生達と

## ☆政治に期待せず、海外援助に期待

子供達との楽しい触れ合いで、すっかり疲れも吹き飛んだ私達を、校長先生が職員室に招いてくださった。大きな体から貫禄と自信が漂う雰囲気だった。

地震や台風時の凄惨な状況を語られた。

その後、「何でもご質問ください」とのことので、ツアー参加者達からは次の様な質問が次々として出てきた。

質) この学校の先生達は皆さん、大学を出ておられるのでしょうか？

答) はい、そうですよ。全員が教育学部出身です。

質) ブラジル等の国では、先生達のお給料が安く生活が苦しいので、2校にまたがってダブルワークされてるケースが多いんですが、ここはいかがですか？

答) そうですねー、セブの平均給与は月額約10,000ペソ（約23,000円）ですから、それに比べると、14,000ペソ～20,000ペソ（約32,000円～46,000円）ですので、「少し良い」といったところでしょうか。

ダブルワークはしなくてもやっていけますが、実際しようと思っても忙しすぎてできない状態ですよ。朝6時から夕方6時まで授業がありますからねー。

アメリカの公立学校の先生達の給料は高いと聞いていますが、日本はどうですか？

質) 日本は高いですよ。私もアメリカ人の知り合いが学校の先生をやっていて、時々色々な話を聞きますが、アメリカの先生達より日本の先生達の待遇はとても良いですよ。

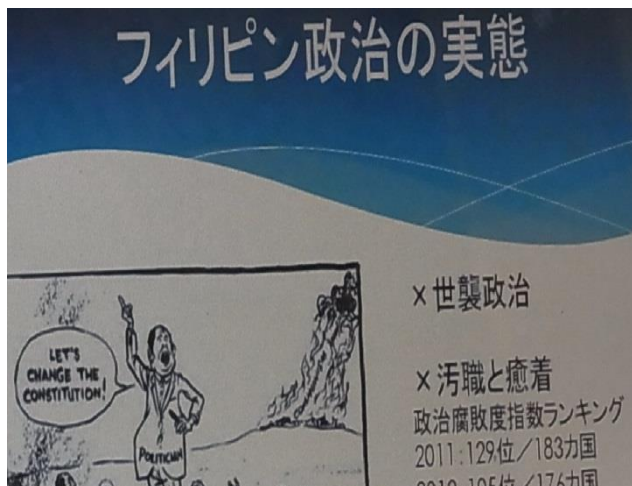
答) わー、だったら私も日本に行って働きたいなー！（笑）

質) 政府からは、災害援助金とか学校運営費とかは、来るのでしょうか？

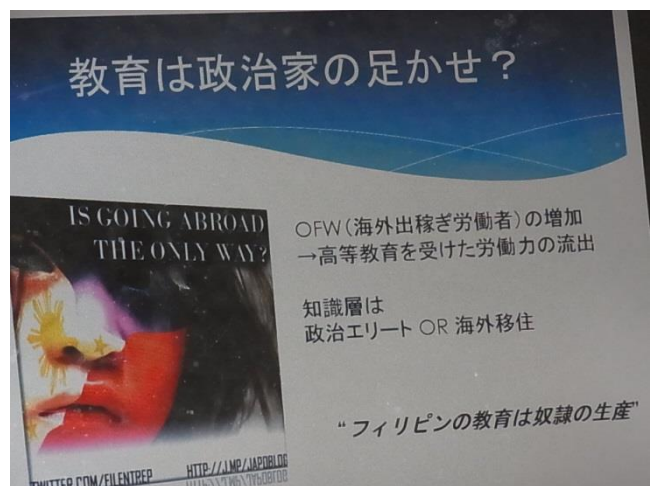
答) あるのはありますが、とても限られています。私達のステークホルダー(重要な鍵を握る人)は皆さん達のような海外援助をしてくださる方達なんです。オーストラリアの NGO からは、子供達のおやつや、学用品の提供等、本当に助かっています。そのおやつで栄養失調にならずにすむ子供も、けっこういますから。

その他の国々からも視察にたくさん来られますので、どんどん来ていただいて、現状を見ていただき、何らかの援助をしていただけるのを期待しています

政治に期待できずに海外援助に期待する。その背景には、ほんのひと握りの人間への富の集中、そして賄賂がはびこり癒着し、国民の事より自分の懐具合を優先する腐敗政治があるのだろう。政治に期待できない国民の悲哀を感じてしまった。



政治腐敗がはびこる



知識層の海外流出も増える

## ③マゼランが命を落としたセブ

### ❖「貧困」が顔をのぞかせる街

翌日はセブ市を観光することになった。

まず、「セブ州庁舎」がホテルから歩いて行ける距離にあるので、散策しながら街の雰囲気を感じようということになった。

ホテルから一歩出ると、灼熱の太陽の日差しが肌を刺す。ツバ広の帽子を頼みにして歩き始める。

市内の概観は「汚い」「古い」「遅れている」と言わざるを得ず、信号はあってもないのと同じで道路横断も命懸け、歩道整備も悪く凸凹の多い歩道で足元から目が離せない、また時々道路に横たわったり、座ったりしているストリート・チルドレンにも心痛めたりで、気を抜く暇がない散策と言っても過言ではない。

「貧困」の局面をいくつも目にしてしまうが、それもそのはずで、フィリピンでは「一日 2 米ド

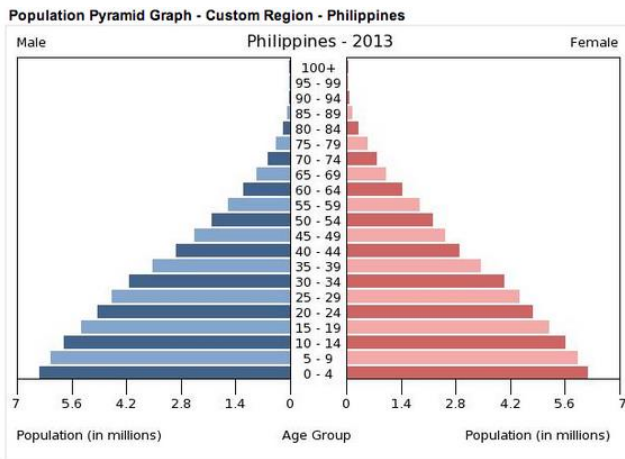
ル以下」で暮らす世界基準の「絶対的貧困率」は、何と 41.5%なのだ！  
 ここにも政治の腐敗が影を落とす。

足元に注意しながら歩いていると、数人の人々がお金を受け取っている小さい建物をよく目にする。これは銀行ではなく、海外へ出稼ぎに行った家族からの送金を受け取る場所だそうだ。

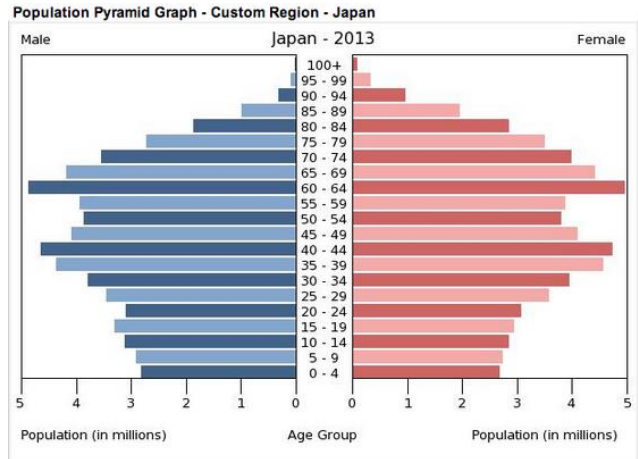
ツアーリーダーによると、「仕事も何もしないで1日中ブラブラしながら、海外へ出稼ぎに行った家族からの送金をあてにして暮らす。それもここではOKで、むしろ羨ましがられるのです」のだそうだ。

その送金で、車を買ったり、電気製品を買ったりもするそうで、全く何の抵抗もないらしい。フィリピンが子沢山なのも、親の子供へのそんな期待もあるそうだから、驚いてしまう。

もちろんそればかりではなく、カトリック教徒が多く、避妊への抵抗もあり、産児制限もなかなか進まない事由もあるそうだ。



羨ましいほどの裾が広がるフィリピンの人口ピラミッド。



高齢化を如実に示す日本の人口ピラミッド。

### ☆フィリピンの歴史をちょっと御紹介

その日の午後はタクシーに乗り、世界に名の知れたリゾート地がある「マクタン島」に観光に出かけた。

このマクタン島であるが、日本人なら誰でも学校で教わった、世界史上の有名な人物と縁が深い。それは「マゼラン」！

1521年、ポルトガルの探検家マゼランはスペイン王の名のもとに、セブ島に上陸し、カトリックの布教を始める。もちろん究極の目的はフィリピンの占領である。アルゼンチンやチリを占領した時と違って、この頃になると、スペインは武力よりも布教で、国を占領する方針に変わっていたらしい。これがフィリピンにおけるカトリック信仰の始まりとなるのであるが、マクタン島の酋長ラブラブはスペインのこの侵略者と勇敢に戦い、マゼランを戦死させたのだった。

海に向かって立つ「ラブラブ像」は凛々しく、勇敢で、今でもセブ市民の「英雄」だそうだ。その後、スペイン遠征軍は一度は撤退するが、1565年に再来して本格的な植民地化をすすめる。これによりセブ市はフィリピン最古の都市となり、6年間にわたり首都として機能したという。



ここで、これと同時代の日本の動きを見てみたい。

織田信長の頃は欧州からの珍品に目を奪われたせいもあってか布教を放任している。ところが豊臣秀吉の時代になると、宣教師たちが布教だけでなく母国の植民地政策の回し者の姿をさらけ出し、日本人達を奴隷として母国に拉致することが相次いだそうだ。この事態を重く見た秀吉はキリスト教禁止に踏み切り、家康もこれを引き継いだ。そして家光の時の1641年にはオランダ人を出島に隔離して、完全に鎖国をする。

この鎖国のおかげで、日本はスペイン領土になるのを免れたのだろうか？

もしそうだとしたら、スペインの策略を見抜いた秀吉は今の日本に大きく貢献したと、再評価したいと思った。



セブを守るため勇敢に戦った酋長ラブラブ



1521年にマゼランが造った大きな十字架

## ☆アメリカの統治を経て、日本の侵略

その後、約380年間の長い間、フィリピンはスペイン領土となる。

人々の会話の中で、数字や曜日、ちょっとした表現がスペイン語なのに驚いたが、歴史を紐解いてみると納得させられる。

長いスペイン支配の後にフィリピンを統治したのはアメリカである。1898年にスペインの大艦隊を破ったアメリカは、2000万ドルという安さでフィリピンをスペインから譲り受けたのだ。

そして1941年、日本軍がフィリピン侵攻をし、マニラを占領した。この時のアメリカ軍の総司令官がマッカーサーであったのだから、彼は本当に日本とは縁が深い。

その時、日本の侵攻を食い止められなかったマッカーサーは、一度オーストラリアに引き上げている。その時に彼が言った言葉、”I shall return.” はあまりにも有名である。

そして、1944年に約束通りに帰って来たマッカーサーは、レイテ島に上陸する。

その翌年、約束通りに日本からフィリピンを奪還したのだった。

レイテ島に行くと、そのマッカーサーが上陸した時の銅像が立っているそうだ。

後日に、セブ市にある「カサ・ゴロルド博物館」と言う、セブ最初の司教となった人の邸宅跡博物館を見に行く機会を持った。

そこに展示されてある資料にはマッカーサーに関するものも多く、日本による侵略時の新聞記事なども多く展示してあった。

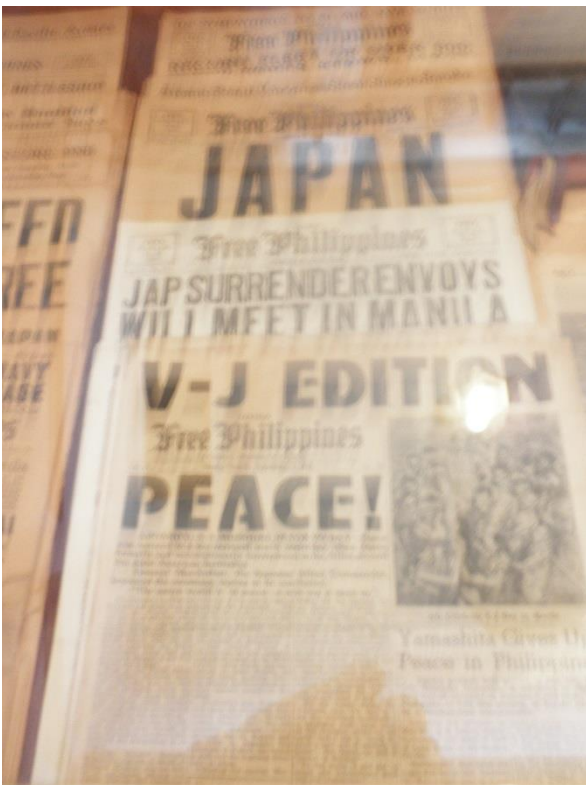
特にフィリピンを日本から奪還した時の彼の演説には、「侵略者を追い払った今、私達は国民に安らぎと平和、発展を保証し・・・」と誇らしく語ってあった。

「侵略者」とは、もちろん日本のことである。

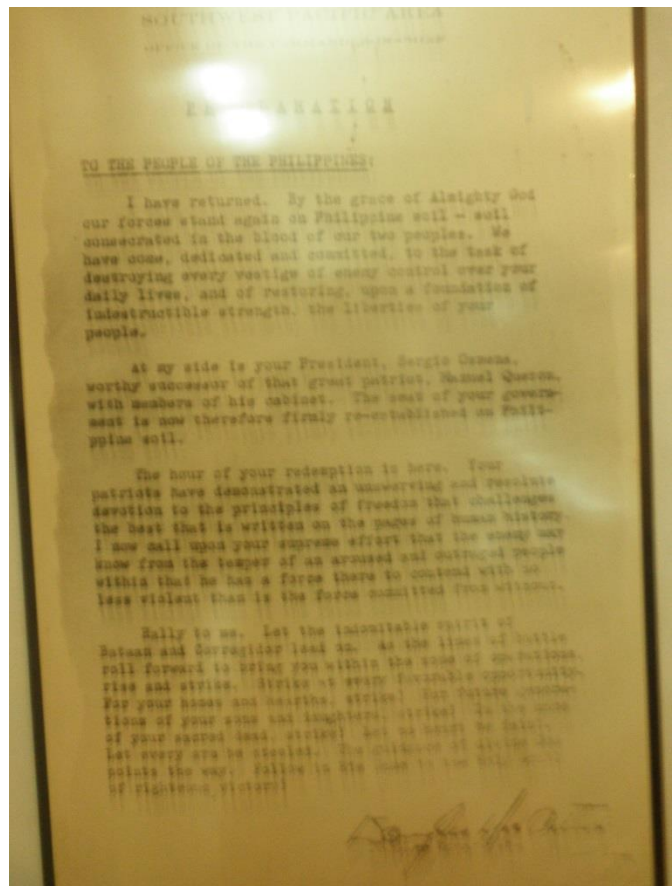
この言葉を突きつけられると、日本人の一人として複雑な心境に陥ってしまう。

「日本も甚大な犠牲を払ったのに・・・」と心の中で呟きたくなる。

そして、二度とこんな過ちをしない、平和国家としての日本で有り続けて欲しいと願った。



降伏後、マニラで開かれることになった  
日本代表团との会議のニュースを伝えている



“I have returned”（私は帰って来ました）で始まる、  
マッカーサーの演説の原稿

## ④農家にホームステイ

セブでの3日目を迎えた私達は早朝より、セブ島の北に、まるで頭のような感じで存在している、バンタヤン島という比較的小さな島に向かった。

島から島への移動と言うと、日本の感覚では30分もあれば十分な感じだが、そこはさすがフィリピンで、そういう訳にはいかない。

セブ・シティから長距離バスに乗って3時間後に、フェリー乗り場に着き、それからフェリーで1時間後やっとバンタヤン島に着く。

フェリー乗り場からは「トライシクル」と言っ、て、モーターバイクの横に人を載せるカートが付けた乗り物で、目指すホストファミリー宅へと風を切りながら向かった。

「えー、4人も載せてるのに、こんなにスピード出していいの？」

と尋ねたくなるのをガンマしている間の約20分で、今夜お世話になる、カキララさん御夫妻のお宅に到着した。

そもそも何故、このカキララさん宅にお邪魔することになったかという、と、ツアーリーダーのYさんが、JAICA派遣の海外青年協力隊員として、この地で1年間活動された時にホームステイされた御縁があるからなのだ。

私達が到着すると、Yさんとカキララさんの御家族がハグされたりして、再会を喜ばれた。こんな点はスペインやアメリカ統治時代の名残りのようだった。

## ☆ここでも台風の爪後は生々しく

私達参加者とも挨拶が終わって、カキララさん御夫妻は御自分達の農園を案内してくださった。奥さん(54歳)は、台風のことを思い出されたのか、興奮冷めやらぬ雰囲気で一気に話された。

「ここはトウモロコシ畑だったんだけど、ユランダ(今年の台風の名前)のせいで、全部ダメになったのよ。怖かったわよー!風速90mもあったんだから!

その日は11:30~1:00位までは、割と静かで、台風の情報も流されてたけど、皆んな、大丈夫だろうという感じで、避難してなかったのよ・・・」

と、その時の恐怖を語られた。

バンタヤン島には、それまで台風はめったに来たことがなかったし、時期も11月8日で既に台風シーズンは過ぎていたのだった。

畑のココナツの木やバナナ、マンゴーの木等が多く倒されているのを目の当たりにすると、島民の驚愕と恐怖が目に見えよう。

被害も甚大で、台風が去った後に病死した人も多かったこと、漁師も11人が命を落としたこと等、奥さんが悲しそうに語られた。

## ☆ 自営農業はフィリピンでは少ない

私達が泊まったカキララ ファミリーの家は大きく、広いキッチン、ダイニングルーム、リビングルームに、部屋が4つもあり、どこかスペイン風の建物の雰囲気を漂わせている。ただ、シャワールームやトイレの設備は良いとは言えないが、国全体の基準から言えば良い方だったと思う。

さすがに冬がない国の建物だけあって、風通し良く作られていて、窓も上部の方は風を通すため空間が作ってあったりしたが、そこから風が吹き込んで来る時はとても気持ち良かった。

しかし、洗濯機もなく、料理も薪を燃やして煮炊きをされるので、日々の家事労働はかなりのものだろうと思われる。

泊まっている間に、ここの旦那さんのカキララさん (57 歳) に色々お話をうかがう機会があった。

この地で農業を始められたのは、カキララさんの御両親で 1942 年に 9 3 0 0 m<sup>2</sup>の土地を 3 5 0 0 ペソ (7 7 0 0 円) で購入され、農地に開拓されてきたのだそうだ。

その後、お二人で農地を拡大され、今では軌道に乗った経営をされているらしい。

日本では当たり前の自営農業だが、フィリピンでは国土の半分以上の土地を、わずか数十人の大地主が所有していて、スペイン時代のプランテーション農業がまだまだ健在なのだ。当然、農村の貧困率は高く、農民の半数以上が一日 1 ドル以下の生活をする最貧困層という。

それからすると、ここバンタヤン島では、自営農業が主流で、お店なども自営が多いそうで、現金収入はさほどなくても、生活レベルそのものは標準より良いのだそうだ。

頑張り屋さんのカキララ御夫妻は、道路に面した自宅の庭先で小さな雑貨屋も営まれている。看護学校を卒業されたばかりの三女の娘さんが、お店番をされていた。カキララさんは、なかなかのチャレンジャーのようだ。

さて、Y さんから「まだ日本の農村風景や農業の紹介はしたことはないんですよ」と聞いていたので、自宅の周辺の農村風景や農作業の様子を写真に収めて用意してきていたが、カキララさん御夫妻に、それを見せながらお話する機会があつて良かった。

日本の農業は 70 歳を超える人達によって支えられている、と言っても過言ではない。私が撮って来た農業の様子の写真も、写っているのは老人ばかり。そして、その老人達が高価な農業機械を使っている写真が中心となった。

でも、カキララさん御夫妻は、その写真に写っているビニールカバーや、その機械等に強く興味を持たれて、色々質問をされた。

「ここでは農業機械はとても高いので、私達には使えない。日本の農業は、国からけっこう補助金が出ているんでしょう？私達は一銭ももらってないから、日本の農業が羨ましいです」と、旦那



那さんが言われた。

しかし、その補助金無しでは日本の農家はやって行けず、利益も大半は機会に食われてしまうのも現状だ。また 日本の農業人口は全国民の3%にも満たない。一方フィリピンの農業人口は全国民の40%と言うから圧倒される。

補助金漬けで、機械を使いながら老人が息絶え絶えにやっている日本農業、一方では補助金なしで機械も無いが、労働力豊富なフィリピンの農業。

これから農業もますますグローバル化する。是非とも、日本ならではの元気な農業に再生して行って欲しいと願う。



今でも牛は大事な労働力



どこかスペイン風の風情があるお宅

## ☆数字に現れない豊かさがある

バンタヤン島でも、ホームステイ先の近くにある小学校を訪問することができた。この小学校は、セブ市で訪問した小学校の規模の3分の1位の大きさで、ステイ先の孫さん達もこの小学校に通っている。

この学校を訪問してすぐ感じたことだが、生徒達が制服を着ていて、セブ市の小学校のように、クラスの年齢が混じってない。同じ年齢の子供が同じクラスで学んでいる。そして、子供達の体格が、セブ市の小学校の生徒よりもずっと良い。

ツアーリーダーのYさんによると、「この島は自営業が多く、都会に比べて収入がいいし、自給自足的な生活ですから、その分子供達の生活も安定してるんです」とのことだった。

平均収入を比べてみると、バンタヤン島では日給100ペソ（約220円）なのに対して、セブ市は327ペソ（約720円）で、セブ市のほう少し良いようであるが、都会に暮らすことは何かと現金支出が多く、その分貧困度が高まる。一方バンタヤン島では、現金収入そのものは低くても、「現金のいらぬ暮らし方」をしていて、生活の質の良さでは優っている。

これは、きっと日本でも言えることだろう。経済が老齢期に入った日本での上手な暮らし方は、

「より現金のいらぬ、自給自足的な暮らし方」と言えそうだ。



美しかったバージン アイランド

## ⑤ 「ゴミ山」に暮らす人達

バンタヤン島滞在中には、バージンアイランドでのスノーケリングも楽しむこともできて、フィリピンの一番の天然資源とも言える「海」を満喫することができた。

3月25日、2泊3日を共に過ごした、カキララ ファミリーともお別れの日が来ていた。カキララさんご夫妻には5人の子供さんがおられる。息子さんお二人はセブ市在住、長女さんは結婚されて同じ敷地内に家を建てられていて、次女さんはバンタヤン町で経理の仕事をされ、三女さんは看護学校を卒業されたばかりで、バンタヤン町にある公立病院で6ヶ月間のボランティア研修中だ。フィリピンでは正規の看護師として働く為には6ヶ月の病院でのボランティア（研修）が義務づけられているそう。でも、時間があるときは、ご両親のお店のお手伝いをされている。

スペインの名残か、ヨーロッパ式のお別れの挨拶をした後、私達はおよそ5時間をかけて、セブ市のホテルに戻って来た。

### ☆NPO セブン スピリット主催の「ゴミ山ツアー」

ややもすると、貧しくて、不衛生で、不便で・・・といった形容詞が並ぶフィリピンだが、若い人達には底知れぬ魅力を湛えた国であるらしく、そこに自分の居場所、生きがい、を見つける若者も少なくない。

「NPO セブン スピリット」の代表Tさんもその一人のようだ。Tさんは、語学留学でセブにやって来たのが縁で、お友達の音楽の先生とともに、セブ市でスラム街の子供達に無償の音楽教育

を提供されている。

そのTさんは、セブ市内から車で約30分のところにある、セブ市のゴミ全てが捨てられている場所、「ゴミ山」のツアーを実施されているのだ。

なぜ、そんなツアーをされてるかと言うと、「そういう所があるのを皆さんに知って欲しい」のが目的だそうだ。「だから何かをできるわけではないんです。セブ市民でも、こんな大きなゴミ山が、自分達の住んでる所のすぐ近くにあるのを全く知らないんですよ。政府も隠しているんです。だから、まず知ってもらい、それが現段階なのです」と言われた。

ホテルでお迎えの車に乗って30分ほどもすると、本当にゴミでできた「丘」が連なる場所にやってきた。もちろん、辺りには悪臭が立ち込めている。

思い思いに口をおおいながら、その壮絶さに私達は言葉を失った。

市内の何も分別されていないゴミを山のように積んだトラックが入ってくると、大勢の大人達や子供達が、はしゃぎながら群がって来る。ゴミの中に混じっている、お金になる物を探しに来るのだ。

このところ経済成長が続くフィリピンだ。セブ市も経済成長が著しく、人口も増加している。そしてそれに連れてゴミの量も日に日に増え、一日に450トンぐらいは出るという。それがひっきり無しに、ここに運ばれてくるのである。

でも、こうやってゴミの中からお金になる物を拾って、この人達は一体いくらぐらいの収入を得るのだろうか？

Tさんによると、一日に100ペソ位（約220円）だそうだ。これは、ホームステイしていたバンタヤン島の平均日給がやはり同じ100ペソ位だから、けっこうお金になると言える様だ。また、時にはゴミの中に何十万円もするような高価な指輪が落ちていたりするらしく、「一攫千金」の夢も魅力らしい。

しかしながら、この有毒なガスが出ている中で、体の方は大丈夫なのだろうか？また、子供達の健康は害されているのではないだろうか？

これもTさんに聞いてみた。

「やはり体は蝕まれているようです。しかし彼等は気にしていません。ここでしか生きる場所がないわけですから。子供達は、ゴミの中から拾った食べ物を食べても、免疫があるのでしょうか、だいたいお腹も壊さないようです。でも、肌荒れがひどかったり、呼吸器系の病気になる子が多いです」

との、答えだった。

## ☆ゴミ山に住む家族と話す

私達は、ゴミの山にかがみ込んで、物を拾っている人達をチラチラと見ながら、悪臭にむせぶのを我慢してリーダーの後に続いた。数分歩くと、ある小さな家に着いた。

家の中には、44歳の奥さんがニコニコと私達に微笑みかけていた。

ゴミ山に住む家族のひとつであるらしい。

家のすぐそばには、その奥さんの子供達3人が元気よく遊んでいた。午前中に学校を終えて、今



は遊ぶ時間のようなだ。

Tさんが、「何でも質問をどうぞ」と言われたので、「ちょっと失礼かなー」と思いながらも色々尋ねてみた。

質問) いつからここに住まわれているんでしょうか？

答え) 6年前からです。以前住んでいた場所が、政府の開発にかかってしまい、取り壊されたんです。それで、他に行く所もなく、ここにやって来ました。

質問) ここから抜け出したいと、思われますか？

答え) 私達は学問も技術もありませんから、他に仕事も見つけれないんです。行く所もありません。悲しい事といえば、昨年5歳の息子が病気で亡くなったことでしょうか。後は、子供達が元気でいてくれさえすれば、ここでの生活は悪くないし、だいたい満足しています。

正直言って、この答えはショッキングだった。

人間は、どんな悪い環境も受け入れることができるのだと、今さらながら教えられる。

そのうちに、旦那さんが帰って来られた。ニコニコされていて、とても楽しそうだ。

それもそうかもしれない。目の前の小さな家は、全て旦那さんがゴミ山から拾ってきた物で作られたそう。床も壁も材木も、テレビも、椅子も・・・全て手作りなのだ。

きっと自分でも誇らしいのだろう、自信さえ漂っている感じがした。

こうなれば、私達に何も言う権利はない。自分達の幸せを確かに感じて暮らされている今、少しでも長く、健康で、子供達も病気をすることなく、このまま幸せでいて欲しい・・・

そう願って、現場を後にした。



本当に「山」となってしまったゴミ



ゴミを漁る子供



## ⑥スラム街で台風災害ボランティア

### ☆ビーチリゾートの高級ホテル

「ゴミ山」を訪問してから6日が経っていた。

このスタディツアーは2つのプログラムに分かれていて、第一プログラムは「ホームステイ」や「スラム」、「ゴミ山」等を通して発展途上国を体験・体感する内容、そして第2プログラムは台風ユランダの「被災者支援ボランティア」をするプログラムなのだ。

この第一、第2プログラム両方に参加したのは、私とCさんの二人だけで、後の参加者の皆さんはお二人が第一プログラムだけ1週間参加され、そしてまた別のお二人が1週間の第2プログラムだけに参加された。

この両方のプログラムの間には4日間のブランクがあり、この間は自由行動となっていた。残念ながら、セブ市は文化遺産が少なく、博物館等も貧弱で、4日間を潰すには時間を持て余しそうだった。そこで、私達はセブの言わば「表の顔」、マクタン島のビーチリゾートで2泊3日間を過ごすことにした。

二人でガイドブックを見ながら、「青い海 白い砂浜」のオーシャンビューで、ちょっと豪華なりゾートホテルに決め、さっそく電話した。

そのレベルのホテルにしては信じられないような安い値段で、そこはさすが物価が安いフィリピンでありがたかった。

帰国後、海外ホテルの予約サイトでそのホテルの値段を見てビックリ！何と一人あたり、「11,700円（朝食のみ）」とあった。

私達が払った現地の値段は一人当たり約6000円だったから、およそ倍になっている！

今まで「自分で直接予約するよりは安いだろう」と思い、楽天等の予約サイトで海外のホテルも予約して来たが、今後、海外ホテルの時は直接ホテルにメールをして予約する方が安そうだ。ひとつ新しい事を学ぶことができた。



夜もグンと豪華なディナーで、おしゃれな気分

## ☆海べたに住む家族達

遠浅の澄みきった青い海で泳いだり、ビーチに寝そべてボーッとしたり、豪華な地中海料理のディナーをしたり、ホテルで働く従業員と親しく会話したり・・・と、優雅に過ごした3日間の後は、スラム街での被災地ボランティアが待っていた。

私達がボランティアをする御家族は、ツアーリーダーのYさんのお友達であるベレンさんのお宅だった。

ベレンさんは、YさんがJAICAの海外青年協力隊としてお仕事されていた時、女性の自立支援事業として「アクセサリー工房」を一緒に作られたお仲間、ベレンさんは今でもその工房をさせている。

ベレンさんのお宅は海岸端の砂浜の上にある、と言っても過言ではない。それもマクタン島の白い美しい砂浜ではなく、日本の普通の海べたにある様な黒い、汚い砂浜だ。

しかもその砂浜にはゴミが散乱していた。そのゴミは何と、私達が見に行ったあの「ゴミ山」から風に舞ってやって来ているのだそうだ！

魚の生臭い匂いに閉口しながら、ベレンさんのお宅に案内された。

屋根の一部は吹き飛び、壁はどこそこ飛ばされて大きな穴が空いている。ここでも昨年11月の台風ユランダの恐ろしさに身が縮む。

「ここではもう住めないから、今は皆でアクセサリー工房に寝泊まりしているのよ」と、ベレンさんがニコニコしながら話してくれる。

現状がどんなに惨めでも、それを受け入れ、その中に小さな幸せを見つけ大事にする・・・これはあのゴミ山に住む人達と共通していると思い当たった。

そもそもベレンさん達はなぜこんな海辺たに住むことになったのだろうか。

Yさんによると、以前住んでいた所に高速道路が通り、その住民達は強制移動させられたそうだ。他に行く所もないし、この海岸に住み着いたそうだ。この海岸地区に住む人達は「スクウォッター」と呼ばれ、政府の所有である海岸地域に、不法にそのまま住み着いた人達を意味する。きっと政府も黙認しているのだろう。

ベレンさんは23歳の男の子を頭に5人の子供がいる。これはフィリピンでは多い方でもない。旦那さんは近くの工場で働いていて、日給が200ペソ（約440円）だそうで、日給が100ペソの人達が41%もいる国では、まだ良い方だとえる。



台風の被害後もそのまま



ベレンさんのアクセサリー工房

## ☆皆んなでブロック塀の修理

その日から3日間の予定で、作業が始まった。

どの参加者も、こういう土木作業はど素人で、どうなることかと心配していたが、Yさんが日本で義援金を集めて来られたお金で、本職の大工さんも雇うことができた。もちろん全ての資材もそれで購入し、いよいよ作業開始の時が来た。

私達の最初の作業は、台風で壊されたブロック塀の修理だった。購入したセメントを、海岸で取ってきた黒い砂と混ぜ合わせてセメントを作る。地面の上に直接置いて混ぜるので、色んなゴミも混じっているが、大きいのを除けた後は気にしないようである。またブロックの積み上げ方も、ワイヤーは数本を簡単に針金で結わえただけで、とても簡単だ。

「そんなやり方で大丈夫ですか？」と言いたくなるが、そこは異文化圏。そういう発想は良くないことは承知している。

ベレンさんも旦那さんも、作業をしながら楽しそうである。

「この家が綺麗になったら、またぜひ来てください。この家はあなた達の家でもあるのですから」と、旦那さんが嬉しそうに言われる。家を修理する喜びは私も経験しているが、これは世界共通のようだ。





セメントを混ぜているところ



ブロックもどうやら積み上がりました

## ☆お祈りに、フィリピン人の心を見る

作業をしていると時間の経つのが本当に早いもので、アッという間にランチタイムとなった。近くで、旦那さんの妹さんが「お惣菜屋さん」をされているということで、そこで買ってすることになった。

日本のお惣菜屋さんから来るイメージとは、全く違う、まるで戦前か戦争中のおかず屋さん（そんなお店があったかどうかは知らない）のような小さなお店で、色々なおかず&ごはんを買い揃え、ベレンさん宅のテーブルに並べた。

皆んながテーブルに着くと、ベレンさんが英語でお祈りを始めた。

“Thanks God for the food to our family, and then share these food also to the family until now we don't have food. Bless us Lord, from the gift to receive, from this bounty to Christ our Lord, Amen.”

「神様、私達家族にこの食べ物をお与えくださいましてありがとうございます。また、今まで食べる物がなかった家族にも分け与えてくださったことにも感謝致します。神様、この賜物、このお恵みを、イエスキリスト様に感謝いたします、アーメン」

疲れか、それとも不衛生な環境に拒絶反応を起こしつつあったのか、食事は喉に通らなかったが、このお祈りに込められた「神への感謝」が、貧しくても心穏やかに暮らすフィリピン人の拠り所なのだろうと、自分で納得した瞬間であった。



ベレンさんの娘さんが通う中学も訪問



## ⑦エピローグ

14日間と、少々長過ぎた感のするフィリピン滞在に別れを告げ、私は今福岡空港に降り立っている。何故だかわからないが、数日前から体のいたるところに痒みが起こり、掻いている間に赤くなったり、腫れたりして、お肌のトラブルに悩まされている。

顔半分も赤くなり、少々腫れているから鏡を見るのも億劫だ。

そんな肌には、まだ冬の寒気が残る日本の冷たい空気は、気持ち良い。

眼前には静かに走る車、見事に整備されたゴミひとつ落ちていない道路、輝く陽の光を浴びる美しい景観、良質の衣服で身を包んだ人々の姿、そんな情景がある。

今思うと、フィリピンでの2週間は、私の親達の子供の頃にタイムスリップしたような旅であった。

その頃から約70～80年。いったい何が日本をこれ程までに発展させ、一体何がフィリピンの発展を阻害して来たのか・・・

西洋の列強侵略から身を守るためにとった鎖国政策か、それとも明治以降から大戦に敗れるまでの富国強兵策か、勤勉に働く国民性なのか・・・

いずれにしろスペインやロシアの植民地になることがなかったのは、アジアの国として本当に恵まれた幸運なことであったと言えよう。

しかし、この物質的に恵まれた、平和で便利な日本に住みながら、毎年30,000人以上もの人が自ら命を落とすのは何故なのか？

フィリピンでは、例え「ゴミ山」に住もうと、笑みがこぼれ感謝の念で人々は暮らしている。

改めて、「物と精神の豊かさ」について考えさせられる、今回の旅であったと思う。



フィリピン最後の夜に

